

病防第24号
平成26年4月28日

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察特殊報について（送付）

このことについて、発生予察特殊報第1号を発表しましたので送付します。

特 殊 報

平成26年度発生予察特殊報第1号

平成26年4月28日
熊本県病害虫防除所長

- 1 病害虫名 ピーマン炭疽病
- 2 病原菌 *Colletotrichum scovillei* Damm, P.F. Cannon & Crous
(旧 *Colletotrichum simmondsii*)
- 3 発生作物 ピーマン
- 4 発生確認の経過
平成24年9月に山都町の露地ピーマンほ場において、ピーマンの果実表面が円～楕円形に陥没し、灰褐色、後に同心円状の菌そうに覆われ、オレンジ色の分生子塊が形成される症状が発生した。
この症状は炭疽病と酷似していたが、従来よりも罹病果実の発生が多く、被害が激しかったため、熊本県農業研究センターで病原菌を分離し、分離菌の形態観察、病原性を調査した。さらに、門司植物防疫所に同定を依頼し、遺伝子解析が行われた結果、従来のピーマン炭疽病菌(*C. gloeosporioides*や*C. capsici*)とは異なる*Colletotrichum scovillei*であることが判明した。
- 5 国内の発生状況
本菌によるピーマン炭疽病は、平成17年に島根県で初確認され、その後5県で発生が確認されているが、九州での発生確認は初めてである。
- 6 病徴
 - 1) 果実がはじめ円～楕円形に陥没し、灰褐色となり、後に同心円状の菌そうに覆われ、オレンジ色の分生子塊が形成される(図1、図2)。
 - 2) 本病が発生すると、多くの果実が罹病するため、収穫量が大きく減少する(図3)。
 - 3) 葉には斑点病に酷似した斑点を生じる。
- 7 病原菌の特徴と伝染方法
 - 1) 本病原菌は、従来の炭疽病菌と同様に被害残さとともに主に土壌中で越冬し、翌年の伝染源となると考えられる。降雨やかん水時の土壌の跳ね上がりにより、ピーマンに菌が付着して感染するため、露地栽培での発生が多い。
 - 2) 本病原菌は最適生育温度が25～27.5℃であり、盛夏期以降に発病が見られ始

め、秋雨の時期にはまん延する傾向にある。ただし、ほ場によっては梅雨期から発生する場合もある。

- 3) 本病原菌による炭疽病は、従来の炭疽病菌より未熟な果実で発病することが多い。一旦発生すると、降雨やかん水時の水滴飛沫により分生子が飛散し、次々に二次感染する。また、傷口があるとそこから感染しやすい。
- 4) 本病原菌は、室内試験においてトウガラシ類、トマト、イチゴ、エンドウ、サヤインゲン及びアズキに対して病原性が確認されているが、自然発生の報告はピーマンとセルリーのみである。

8 防除対策

- 1) 降雨等による水はねが感染につながるため雨よけ栽培を行う。なお、天井被覆が難しい場合には、マルチ被覆等により土壌からの水はねを防ぐ。
- 2) 伝染源となる発病果、発病葉は見つけ次第ほ場外に持ち出し、埋設等適正に処分する。また、古葉等は取り除き株元を清潔に保つ。
- 3) ピーマンに傷をつけないように、防風対策をとる。枝つり、支柱などしっかりと固定する。また、過湿を避けるため適正な剪定を行い、通気を良くする。
- 4) 前年に発生の見られたほ場では、早期の感染を防ぐため梅雨期から予防散布を行う。薬剤散布の際は農薬安全使用基準を遵守する。



図1 ピーマン果実の症状

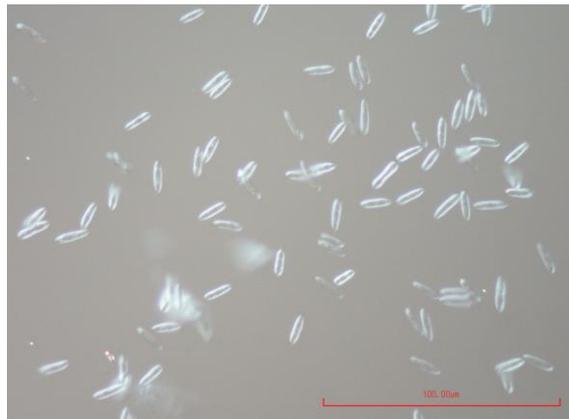


図2 *C. scovillei*の分生子(SNA培地上)
(門司植物防疫所原図)



図3 多発生ほ場の状況

問い合わせ先

熊本県病害虫防除所

(農業研究センター 生産環境研究所)

病害虫研究室 予察指導係)

担当：児玉、荒木 TEL：096-248-6490